



# 水星交響樂團

第56回定期演奏会

指揮 齊藤 栄一

2017年10月29日 Sun.

13:00 開場 13:30 開演

すみだトリフォニーホール 大ホール

## ごあいさつ

本日はお忙しい中、私ども水星交響楽団(略称：水響)の演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

さて、今回のプログラムは、前半に北米・南米を代表する作曲家コープランドとヴィラ＝ロボスの作品、そしてメインにブラームスの代表作である交響曲第1番という水響得意の多少(笑)ユニークな組み合わせとなっております。

アーロン・コープランドは、移民の国アメリカで漸く現れた「アメリカ独自の音楽」を産み出した音楽家のひとりであり、次回の演奏会でとりあげるレナード・バーンスタインの師匠でもあります。代表作には「市民のためのファンファーレ」「エル・サロン・メヒコ」等の作品がありますが、本日演奏する「ロデオ」もその一つです。通常は「4つのダンスエピソード」という組曲形式で多く演奏されますが、本日は全曲版でお送りします。組曲にはない魅力的な場面ぞろいで、特にあえて音程をはずして調律されたホンキートンク・ピアノが活躍しますのでご注目下さい。

「ブラジル風バッハ」はブラジルの作曲家エイトル・ヴィラ＝ロボスの代名詞とも言われる代表作です。それぞれ異なる編成による9曲からなり、チェロアンサンブルによる第1番やソプラノ独唱とチェロによる第5番が特に有名です。第7番は、フル編成のオーケストラによる性格の異なった4つの曲からなっていますが、ブラジル風バッハ9曲のなかでも最もバッハの影響が濃い充実した内容を持つと私は思います。重厚な響きのなかに漂うエキゾチックな雰囲気是非お楽しみに。

ヨハネス・ブラームスについては皆さまもよくご存知と思います。音楽史上欠かすことができない傑作中の傑作であり、演奏している立場からしてもこれほどやりがいのある曲はめったにありません。水響としても約20年ぶりに取り上げることでありますが、20年間の万感の想いをこめてお届けします。

それではごゆっくりとお楽しみください。

水星交響楽団  
運営委員長 植松 隆治



## 水星交響楽団



水星交響楽団は、1984年に一橋大学管弦楽団の出身者を中心に結成されたアマチュア・オーケストラである。

都内の主要ホール等で、定期演奏会を年2回行い、マーラー、バルトーク、ストラヴィンスキー、プロコフィエフ、ホルストなど大編成の曲に積極的に取り組んでいる。

楽団の名前の由来は、一橋大学のシンボルである「マーキュリー」やセロ弾きのゴーシュの「金星音楽団」から来ている等いろいろ考えられる。

## 本日のプログラム

---

### アーロン・コープランド バレエ「ロデオ」全曲 (約 25 分)

1. カウボーイの休日
  2. 牧場の夜想曲
  3. ランチ・ハウス・パーティー
  4. 土曜日の晩のワルツ
  5. ホーダウン
- 

### エイトール・ヴィラ＝ロボス ブラジル風バツハ第7番 (約 30 分)

- 第1楽章 前奏曲 (ポンテイオ)
  - 第2楽章 ジグ (カイピラ風カドリユ)
  - 第3楽章 トッカータ (一騎打ち)
  - 第4楽章 フーガ (対話)
- 

休憩 (15 分)

---

### ヨハネス・ブラームス 交響曲第1番 ハ短調 Op.68 (約 45 分)

- 第1楽章 Un poco sostenuto - Allegro
  - 第2楽章 Andante sostenuto
  - 第3楽章 Un poco alletretto e grazioso
  - 第4楽章 Adagio - Più andante -  
Allegro non troppo, ma con brio - Più allegro
- 



### 指揮 齊藤 栄一

京都大学にて音楽学を、国際基督教大学大学院にて美術史学を研究。この間、指揮法を尾高忠明、田中一嘉、円光寺雅彦の各氏に師事。1981年には京都大学交響楽団と2週間に渡り、ドイツ、オーストリアにて演奏旅行を行い、ザルツブルグ音楽祭などにて指揮。82年には関西二期会室内オペラ・シリーズ第9回公演、ブリテン作曲「ねじの回転」(関西初演)の副指揮者を務める。

84年に水星交響楽団の常任指揮者に就任。水星交響楽団、オルフ祝祭合唱団との共催で、佐多達枝振り付けのバレエ「カルミナ・ブラーナ」(95年、東京文化会館)、「ダフニスとクロエ」(99年、新宿文化センター)を指揮した。その後、「カルミナ・ブラーナ」のバレエ公演では、神奈川フィル、東京シティ・フィルも指揮している。2005年には、同曲を含むオルフの「トリオンフィ」3部作(4台のピアノと打楽器)を指揮している。

明治学院大学文学部芸術学科教授。著書に「往還する視線 14-17世紀ヨーロッパ絵画における視線の現象学」(近代文芸社)、「振っても書いてもしょせん酔狂」(水響興満新報社)がある。

## アーロン・コーブランド バレエ「ロデオ」全曲

本日の演奏会の冒頭を飾るのは、アメリカを代表する作曲家の一人、アーロン・コーブランド (1900-1990) の代表作、バレエ音楽『ロデオ』。演奏会の開幕にふさわしい、華やかな曲です。

さて、「アメリカ音楽」といったときに、皆さんは何を思い浮かべられるでしょう。ブルースやゴスペル、ジャズ、カントリー・ミュージック、ラップといった、多様な背景を持つポピュラー音楽。ミュージカルや、映画音楽も盛んです。

では、いわゆる「クラシック音楽」となるとどうでしょう。世界的指揮者であり作曲家であったレナード・バーンスタインは、水星交響楽団が愛好し、交響曲など数々の作品を演奏してきました。『ラプソディー・イン・ブルー』『パリのアメリカ人』に代表されるジョージ・ガーシュインや、『タイプライター』『そりすべり』などで知られるルロイ・アンダーソンの作品は、曲名を知らずとも、誰もが一度は耳にしたことがあるでしょう。楽譜に休符しか書かれていない「4分33秒」で知られるジョン・ケージや、「ミニマル音楽」でジャンルを問わず人気のあるスティーヴ・ライヒ。近年なら、『スターウォーズ』や『E.T.』、『ハリー・ポッター』など数々の映画音楽で知られるジョン・ウィリアムズを思い浮かべる方もいらっしゃるでしょう。

このように様々な音楽を生み出してきた、音楽大国アメリカ。そのアメリカの「クラシック音楽」の特徴の一つは、アメリカのポピュラー音楽との距離の近さにあります。例えばガーシュインはジャズとクラシックの融合を体現した人物でしたし、バーンスタインは交響曲などの純音楽的大作を多く世に送り出し、またマーラーをはじめとするクラシック音楽の指揮者として高名であると同時に、『ウェストサイド・ストーリー』などのミュージカルでも人気を博しました。ジョン・ウィリアムズは、西欧のクラシック音楽から多大な影響を受け、極めてシンフォニックな映画音楽を次々に書き続けるとともに、協奏曲などの純音楽的作品も書いています。

もともと、多様なポピュラー音楽を生み出したのは、アメリカの民族的多様性と深く関係しています。イギリス、フランス、ドイツ、スペイン、アイルランド、ロシア、ポーランドなどヨーロッパ各国や、ラテン・アメリカ、奴隷制の時代に連れて来られたアフリカ系、20世紀以降増え続けるアジア系など、アメリカには様々な出自を持つ人々がおり、「人種のサラダボウル」と形容されます。様々な民族が流入することは、各民族の音楽を含む文化が流入することを意味し、またそれらの相互作用によって新たな文化が創造されることをもたらします。「アメリカらしさ」とは、アメリカが内包する多様性と、それをもとにした創造性であるといえるでしょう。

他方で、この複雑な「アメリカらしさ」は、「アメリカ的」音楽を書こうという模索を難しくします。多様性と創造性は、裏を返せばまとまりを欠き、分裂的であることを意味するからです。この問いに正面から向き合い、「アメリカ的」音楽を模索したのが、コーブランドでした。

コーブランドは、ニューヨークでユダヤ系ロシア移民の家庭に生まれ、14歳の頃からピアノや作曲を学びました。ジャズのイデオロムを取り入れて世界的作曲家となったガーシュインより後の時代にあって、始めは彼もパリ留学中にジャズの要素を取り入れた作品を多く書きました。しかしながら、この留学を通して彼は、次第に、一般大衆と現代音楽との隔たりを意識し、ジャズとクラシックの融合というガーシュイン以来のアメリカ音楽の傾向から距離を置き始めます。そして、留学からの帰国後、ジャズばかりではない「アメリカらしさ」を追求し始めます。彼は一方でヨーロッパからの入植以来アメリカにも根付いている西洋的音楽語法を極め、他方でアメリカ民謡を収集して作品に取り入れ、また一般大衆にもわかりやすい簡明な作風を築き上げていきます。ここにおいて彼は、現代音楽と一般大衆の乖離という問題意識と、一般大衆が築いてきた国である「アメリカらしさ」の模索とに、一つの答えを見出したのです。それが彼の簡明な作風であり、その作風が、広く人々の心を今なお掴んで離さないでしょう。

本日演奏するバレエ音楽『ロデオ』は、そうした作風の象徴的な作品。バレエ・リュス・ド・モンテカルロの委嘱で作曲されたバレエのための音楽です。このバレエの内容や曲の構成について解説する前に、少しだけ作曲時期についても触れておきましょう。作曲されたのは1942年、第二次世界大戦の頃でした。同年の彼の作品として、やはり代表作に挙げられる、「市民のためのファンファーレ」が知られます。ファンファーレは大戦中にアメリカ市民を勇気づける意味合いを持った作品であった一方で、『ロデオ』の内容は極めて娯乐的。一見全く異なる方向を向いているようにも思えますが、多くの主題をカウボーイ民謡に求めた『ロデオ』も、大戦期という時代背景の下で国民主義的色彩を帯びた作品でもありました。「アメリカらしさ」を追求してきた彼は、この戦争の時代、作曲を委嘱するのにつけの人物であったという側面もあるのです。

ロデオとは、カウボーイたちが荒馬を乗りこなして競う西部開拓時代のスポーツで、競技のあとには、集まった群衆とともにダンスや夕食も楽しむ一大イベントでした。また、家々が遠く離れ、集落がまだ形成されていなかった開拓時代にあっては、西部の女性が配偶者を見つける場でもあったといえます。



ロデオの様子

バレエの脚本は、「牧場の娘が一番人気のカウボーイに夢中になり、彼に近づくために男装するものの、それがほかのカウボーイの不評や女たちの嘲笑を浴びてしまう。しかし、最後には女性として、理想のカウボーイと結ばれる」というもの。古い時代における伝統的な性別の役割への風刺にも見えるこの内容は、脚本家の経験を投影したものであるといわれていますが、音楽はとても華やかなもの。初演は大評判で、バレエや、コンサート用に一部をカットした「4つのダンスエピソード」は今日に至るまで広く演奏されています。ちなみに、コープランドの指揮により、「4つのダンスエピソード」は自作自演録音が残っていますが、今回演奏するのは、全曲版（正確にはバレエ上演から短い序奏のみカット）。組曲ではカットされた1曲を加えた、以下の5曲で構成されます。

### 1. カウボーイの休日

曲は元気の良いファンファーレに始まり、続いて木管楽器がこのバレエの主人公であるカウガール（カウボーイ風に男装した女性）の主題を提示します。これに続いて、ロデオ競技の主題が、金管によって提示されます。主人公のカウガールが、村一番のカウボーイに近づくために入場してくる場面です。続いて、「お嬢さんジョー」という西部の鉄道歌とともに、カウボーイが入場してきます。この鉄道歌は大編成の打楽器によって演奏されます。中間部には同じく西部民謡「もしも、あの男がカウボーイになってくれたなら」が用いられています。この西部民謡は、トロンボーンやトランペットなど様々なソロで繰り返されたあと、カノン式に盛大に奏され、続いて再びカウガールの主題が静かに帰ってきます。前述の西部民謡がフルオーケストラで再び登場して、次の曲へと進みます。

### 2. 牧場の夜想曲

この曲は、カウガールの恋煩いの様子を表したものの淋しい序奏部を経て、オーボエのソロによるモチーフが現れ、拍子が頻繁に変わって進行します。主人公の孤独を映すように西部の荒野の静寂な夜の情景を描きます。カウガールは孤独に荒野を走り回り、それをカウボーイが見つけるのですが、カウボーイは困惑した様子で、微妙な距離感が続きます。



西部の荒野 (写真はアリゾナ州)

### 3. ランチ・ハウス・パーティー (バレエのみ)

村のランチパーティーでの情景を描いた3分ほどの短い曲。前半はピアノ・ソロで演奏されるのですが、このピアノは「ホンキートンク・ピアノ」が指定されています。これは音程が狂ったピアノのことで、コープランドは楽譜上にそうしたピアノの使用を指定しています。ホンキートンクとはもともとアメリカ南部の酒場のことで、そこに調律もされず放置されているようなピアノが名前の由来です。このピアノ・ソロをクラリネットがより情感的に受け継ぎます。

カウガールは、カウボーイの様子を見、男装によって近づくのを改め、彼女自身の女性らしさをカウボーイに訴えかけていくことになります。

### 4. 土曜日の晩のワルツ

フィドル（ヴァイオリン）の不協和な調弦のような序奏部に続いて、カウボーイが愛馬との別れを惜しむくさらば愛しのまだら馬>から引用された哀愁を帯びたワルツが出現します。中間部はスローなスクエアダンスに転じ、再び短縮されたワルツで終わります。

### 5. ホーダウン

活気に満ちたスクエアダンスの音楽で、しばしばこの曲のみ単独で演奏されます。「ホーダウン」とは酒をあおりながら全員踊り疲れて倒れるまで踊ること。騒々しい序奏の後に登場する主題は民謡「ナポレオンの退却」。再び1曲目で登場したロデオの動機が登場した後、「ナポレオンの退却」はホルンの簡単なリズム伴奏とともに弦楽合奏で演奏されます。続く中間部はアイルランド民謡「マクラウド嬢のリール」に基づいたもので、様々な楽器によるソロが受け継がれていきます。この途中でクラリネットとオーボエによるスコットランド民謡「ギルデロイ」を挟んで、最後はそれぞれを組み合わせた音楽で、カノン式にロデオのテーマが演奏されて曲のクライマックスとなります。ここで会うボーイと村の娘はようやく結ばれます。最後は、「ナポレオンの退却」が全奏で再び取り上げられて華々しく曲を閉じます。

カウボーイを中心に、西部開拓時代の風情たっぷりなこの曲。組曲とは異なり、全曲版はなかなか日本での演奏機会がありませんが、組曲ではカットされた「ホンキートンク・ピアノ」なども含め、お楽しみください。なお、今回の演奏では、このためにホンキートンク・ピアノを調達します。

(東海林 拓人)

## エイトール・ヴィラ＝ロボス ブラジル風バッハ第7番

ついに来ました！水星交響楽団久々の南米作曲家！いやー南米クラシック好きの筆者はこの時をずっと待っていました！今回は満を持して、南米音楽の父であり20世紀のクラシック音楽を代表する作曲家、エイトール・ヴィラ＝ロボスの代表作「ブラジル風バッハ」より第7番を取り上げます。

いや、待ってください。客席の皆さまの中にはこんな声もあるのではないのでしょうか？「えっ、南米といえばサッカーでしょ？最近だとオリンピック！サンバ（カーニバル！）でしょ？あとはタンゴとかボサノバとか？クラシックなんて馴染みあるの？」こんな方々のために、まずは、南米とクラシックの関わりについてご紹介したいと思います。

### 1. 南米のクラシック音楽について

みなさんご存じのとおり、南米地域の多くは16世紀以降に西洋諸国による入植が行われましたが、政治経済面以外に文化面でも西洋の芸術が多くもたらされました。ブラジルでいえば、ポルトガル人により500年前からクラシック音楽が持ち込まれた記録があり、19世紀にはオペラハウスまで建てられてヨーロッパの演目が上演されていました。

当初はいわゆる西洋音楽の模倣でしかなかったものの、20世紀以降は徐々に国民の心に根付く民謡・儀式などで用いられるリズムやメロディがオマージュされるようになり、南米クラシックの世界は西洋の器楽法や和声法と古くから根付いてきた国民性・民族性が入り混じった、独特な作品観に昇華されていったのです。

後述するヴィラ＝ロボス以外に、こんな作曲家たちが偉大な作品を残し今も我々を楽しませてくれます。哀愁の（泣きの）メロディとか、どこか趣が似ている面もありますね。今回演奏するブラジル風バッハなどはまさにその典型です。

筆者の知る一聴の価値あり作曲家を並べてみました。

### 【おすすめ中南米クラシック音楽の巨匠たち】

国名	作曲家	代表作	説明
メキシコ	カルロス・チャベス (1899-1978)	交響曲第2番「インディオ」	ヴィラ＝ロボスと並ぶ中南米クラシックの大作曲家であり、教育家。交響曲は4作書いており、第2番はあの偉大なバーンスタインが来日公演で演奏している！レニーと繋がるの深い水響で、いつか演奏したい（野望）。
	シルベストレ・レプエルタス (1899-1940)	マヤ族の夜・センセマーヤ	「南米のストラヴィンスキー」の異名を持つ奇才。スペイン内戦の際には義勇軍に参加する行動派。極貧生活の中で数々の刺激的な作品を残しています。特に代表作「マヤ族の夜」はまさに狂気の沙汰！
	アウトウーロ・マルケス (1950-)	Danzón シリーズ	メキシコ現代音楽の人気作曲家。キューバの伝統的な音楽・ダンスジャンルの「Danzón」をモチーフにしたオーケストラ曲が大ヒット。中でも第2番は最高傑作！くうーかっこいい！
プエルトリコ	ロベルト・シエラ (1953-)	交響曲第3番「ラ・サルサ」	プエルトリコの現代作曲家。偉大なナクソス・レーベルが教えてくれた(Thanks!Mr.Yan!)ラテン・アメリカ最高のシンフォニー「ラ・サルサ」を作曲しています。まさにサルサダンスで出来たシンフォニーはアメリカを中心に人気沸騰！ちなみにシエラ、あのリゲティの弟子です。すげー。
ベネズエラ	エベンシオ・カステリャーノス (1915～1984)	パカイリグアの聖なる十字架	ベネズエラを代表する作曲家。近年世界的に有名になった指揮者グスダーボ・ドゥダメルも自国のレパートリーとして多く取り上げている。
アルゼンチン	アルベルト・ヒナステラ (1916-1983)	バレエ音楽「エスタンシア」・ハープ協奏曲	アルゼンチンの作曲家・教育家。代表作の「エスタンシア」はアルゼンチンの地域音楽・民謡をオマージュした南米クラシックを代表する名曲！マランボ！あのアメリカの大作曲家アーロン・コーブランドの弟子でもある。
	アストル・ピアソラ (1921-1992)	リベルタンゴ、アディオス・ノニーノ、バンドネオン協奏曲など多数	なんとピアソラはヒナステラの弟子であり、彼のもとで音楽理論や作曲を学んだ。独自の世界観でタンゴの革命を起こし、ワールドワイドでメジャーなミュージシャン。

このように20世紀以降にラテン・アメリカで活躍した作曲家たちに共通するのは、西洋音楽の伝統的な形式を重んじながら、オリジナリティを民族音楽に求めていく姿勢です。街に流れる、故郷で慣れ親しんだ音楽こそが、彼らのアイデンティティであり、クラシック音楽の形式は表現の手段として存在するのかもしれませんが。

そして、なぜか出世作には短い曲が多いのが特徴！交響曲でも30分を超える曲はほとんどありません。陽気なラティーニャ達は意外に飽きっぽい！？短いぶんだけ一回の演奏会でたくさん曲が聴けるし、今後日本のオーケストラもたくさん演奏してほしいなと思う次第です。

### 2. ヴィラ＝ロボスとは

～ブラジルが生んだ偉大な音楽家・教育家～



ヴィラ＝ロボスさん、偏屈そうなチョイ悪オヤジでカッコいいです！

Heitor Villa-Lobos (エイトール・ヴィラ＝ロボス、1887-1959)は1887年3月5日、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロに生まれました。多くの偉大な作曲家がそうであったように、ヴィラ＝ロボスも決して裕福な家庭で生まれたわけではなく、父親のラモンはブラジル国立図書館で職を得ていたものの、生活は当時の水準以下といったところ。貧しい生活の中で、音楽好きだったラモンは息子にチェロやクラリネットを教え、自宅で仲間たちと夜な夜な開催するアンサンブル大会に参加させていったようです。その頃のブラジルでは「choro (ショーロ)」と呼ばれる即興のアンサンブルがポピュラー音楽として定着

しており、ギターなどの楽器も覚えたヴィラ＝ロボスはショーロを通じて自身の音楽観を形成していったようです。(のちにヴィラ＝ロボスは「ショーロ集」を自作で発表しています)



↑ショーロ・バンドはフルート・ギター・カヴァキーニョ(ウクレレみたいな4弦楽器)・マンドリン・バンテイロ(タンバリンに近い打楽器)が基本編成。ブラジル音楽の源流に位置付けられ、サンバもボサノバもショーロ文化から始まったと言われています。

精力的な10代を過ごしたヴィラ＝ロボス青年は、その後オーケストラのチェロ奏者としてわずかな収入を得ながら、室内楽を中心に作曲家として本格的に活動しました。地方での自身によるヴィラ＝ロボス全曲演奏会開催を皮切りに、当時の首都リオでの演奏会開催など、少しずつブラジルの楽壇で名が知れるようになってきたのが20代後半-30代前半。そして、31歳のとき、人生の転機が…かの世界的に有名なピアニストであるアルトゥール・ルービンシュタインとの出会いでした。

当時から世界的に有名だったルービンシュタインですが、ブラジルを演奏旅行で回っていた際に地元の音楽家から「天才」として紹介されたのがヴィラ＝ロボスでした。出会った際はその無愛想で偏屈な姿勢に反感を持ったようでしたが、ブラジル滞在中も終盤に差し掛かったある朝、目が覚めると蚊帳の外でヴィラ＝ロボスが楽器を担いで待機していたとのこと。彼は自分の曲を聞かせるために起きがけを狙って奏者を集めて待機していたのです。その場で演奏したヴィラ＝ロボス作曲のフルートとクラリネットによる「ショーロス」を聞いたルービンシュタインは、すぐその才能に惚れこみ、ヨーロッパに帰ったのちヴィラ＝ロボスの曲をたびたび演奏会で紹介して普及に貢献するだけでなく、彼のパリ留学の費用を(なんと本人に内緒で!)バックアップしています。

またルービンシュタインとの出会いと同じころ、第一次世界大戦の講和条約締結を記念したコンサートが政府によって企画され、ガラコンサートの演目として作曲の依頼が回ってきました。気合を入れて作った交響曲第3番「戦争」は初演で大成功をおさめ、第4番「勝利」第5番「平和」も続けて作曲するなど、ブラジルでの彼の地位を引き上げることにあります。こうして、政府や楽壇、そしてヨーロッパでの支援者を得たヴィラ＝ロボスは、1923年に悲願のパリ留学を実現させるのです。

パリでは(勉強というより)自身の作曲した管弦楽曲・合唱曲を精力的に発表し、ラヴェルやプロコフィエフといった著名な作曲家たちとも親交を深めるなど、作曲家としての国際的な地位を一気に高めていきました。ヨーロッパの音楽家にとって、ヴィラ＝ロボスの音楽は、非常に新鮮なものとして捉えられたようです。

一時帰国などもありましたが、パリには1930年まで滞在しました。帰国後はブラジル音楽を題材にした曲を精力的に作曲し、ブラジル国内だけでなく国外の演奏旅行も活発に行いました。また音楽芸術教育庁の長官に就任し、音楽教育の普及に尽力しました。教育活動の一環で、4万人とも言われるサッカースタジアムの観客に向けてブラジル国歌を合唱指揮する機会もあったようです。国際的な名声を得たショーロ好きの少年は、アメリカやフランスを中心に世界中で演奏活動を展開し、1959年に72歳でその華々しいサクセスストーリーに幕を下ろすのです。

### 3. ブラジル風バッハについて

ヴィラ＝ロボスは生涯で1,000曲以上を作曲したといわれる大変な多作家です。(紛失・消滅した譜面もあり、総数は本人を含め誰も正確に把握していない!)ジャンルも室内楽、合唱、管弦楽曲、交響曲、バレエや映画音楽まで様々。本日演奏する「ブラジル風バッハ」はその中でもヴィラ＝ロボスを代表作といえます。

原題は「Bachianas Brasileiras」で、直訳すると「ブラジル風・バッハ風」となります。日本語訳だけ見るとバッハをブラジル風にアレンジしたような印象を持ちますが、おそらく本人の意図ではない。どちらかと言うと「ブラジル風かなー? やっぱりバッハ風かなー? どっちも好きだから両方題名にしちゃおう!」でしょうか。筆者としては、バッハもブラジル音楽もショーロも全部大好きなヴィラ＝ロボス青年が、リスペクトしているこれらの音楽をセンス満点に譜面に散りばめた作品だと思っています。1番から9番まで形式や編成も様々ですが、すべてパリ留学後に書かれ、ヴィラ＝ロボスの中では後期を代表する作品に位置づけられます。帰国後の演奏旅行の目玉として、世界各地で演奏されてメジャーになったに違いありません。本日演奏する7番を含め、編成の違いをまとめてみました。

番号	作曲年	編成
第1番	1932年	チェロ8本
第2番	1933年	室内オーケストラ(管楽器1管編成)
第4番	1942年 (管弦楽版)	ピアノ曲として構想されたが改訂されオーケストラ曲に
第5番	1938年	ソプラノ独唱とチェロ8本
第6番	1938年	フルートとファゴット
第7番	1942年	フルオーケストラ(3管編成)
第9番	1945年	無伴奏合唱版もしくは弦楽合奏版

### 4. ブラジル風バッハ第7番

この曲は一言でいえば「ブラジルの哀愁」。南米音楽ということでド派手なサウンドを想像される方も多いたとは思いますが、第7番は哀愁に満ちた美しいメロディがたくさん出現します。バッハ的なフーガを巧みに使ったオーケストレーションや南米ノリの裏拍ピッチカート伴奏は、さすが天才ヴィラ＝ロボス! おすすめ作曲家で派手な曲ばかり列挙した自分が恥ずかしくなるくらい、ノスタルジックな曲となっています。

### 第1楽章 前奏曲 (ポンテイオ)

ポンテイオ (Ponteio) というのは同時期に活躍したブラジルの作曲家カマルゴ・グアルニエリ (1907-1993) の用いた造語で、ポルトガル語の pontear (=ギターなど弦楽器などを弾く) と prelude (=前奏曲) を混ぜたものだそうです。その名の通り、冒頭の木管楽器の物哀しいメロディを優しく弦楽器がピッチカートで伴奏します。曲は徐々に盛り上がり、金管打楽器が入ってオーケストラの全奏を迎えますが、どこか影のある音楽。ああっ、哀愁のカサブランカならぬ哀愁のブラジレイラ。

### 第2楽章 ジグ (カイピラ風カドリーユ)

ジグ (イタリア語で Giga) は、バロック期の舞曲を指します。カイピラ風カドリーユ (Quadrilha Caipira) はブラジルのカイピラ文化 (田舎風) の男女ペアの民族舞踊です。ヨーロッパのジグと同様に、6/8 拍子で早いリズムの音楽です。フーガ風に6拍目から各楽器が折り重なっていくオーケストレーションは水響腕の見せどころか!? 中間部では哀愁のクラリネットメロディが炸裂します。

### 第3楽章 トッカータ (一騎討ち)

トッカータ (toccata) とは、主に鍵盤楽器による、速いフレーズや細かな音形の変化が特徴の即興音楽ですが、ブラジル風バウハ7番には、一騎打ち (Desafio) の副題があり、これは田舎の歌合戦 (演者が挑戦し合う) を指すともいわれています。冒頭 CoCo (ココナッツの固い種皮で木を叩く南米ならではのスペシャルな楽器) とシロフォンの連打を合図に、管楽器と弦楽器がまさに歌合戦! これまた哀愁のトッカータが織り成されていきます。

第二楽章も同じですが、早いメロディ、分厚いオーケストレーションであっても、どこか哀愁が漂い、ここが7番最大の魅力であると思います。弦の裏拍ピッチカートはこの楽章でもいろいろな場面で登場します。ぜひ耳を澄ませてみてください。



第3楽章の冒頭で演奏されるCoCoはココナッツの実を板の上で叩く不思議な楽器。

### 第4楽章 フーガ (対話)

この楽章は非常にバウハ的と言えるのではないのでしょうか! 得意のフーガ形式で、冒頭チェロの主題をさまざまな楽器が折り重なりながら引き継いでいきます。悲哀のこもった深遠なテーマで、とてもサンバだけがブラジルじゃないことを確信するでしょう。折り重なり膨張する哀しみが、ティンパニの登場から一気に怒涛となり全奏クライマックスへ! なお、最後のフェルマータに出てくるボンボ (Bonbo) という楽器は南米 (特にアルゼンチンやボリビア) のフォルクローレ (簡単に言えば民族音楽) で使われるもの。CoCo に続きまたも民族楽器を用いて、Bachianas Brasileiras 「ブラジル風・バウハ風」のコンセプトにふさわしい終末を迎えるのです。



Bonbo

最後にブラジル風バウハ第5番、アリアの歌詞を一部抜粋してご紹介します。作曲は第7番の約4年前ですが、世界観が近いと思います。

Em ansios d'alma para ficar bela  
美しくなるために魂は不安を覚え  
Grita ao céu e a terra toda a Natureza!  
大空と大地、大自然に向かって叫ぶ  
Cala a passara da aos seus tristes queixumes  
その悲しい嘆きを聞き、鳥たちは黙る  
E reflete o mar toda a Sua riqueza...  
そして、海はその輝きすべてを映す  
Suave a luz da lua desperta agora  
やさしく月の光は今日覚めさせる  
A cruel saudade que ri e chora!  
笑い、叫ぶ残酷なノスタルジーを

本日の演奏を聴きながら、少し故郷のことを思い出してみてください。南米のクラシック音楽の魅力が一層理解いただけるとと思います。

(椿 康太郎)



## ヨハネス・ブラームス 交響曲第1番 ハ短調 Op.68

間違いなくオーケストラによるクラシック音楽を代表する曲のひとつですよね。その衝撃の冒頭に魅せられたのはいつのことだったのでしょうか？高校生の頃のFMラジオの音だったと思うのですが... なんだかダァーっと衝撃的な分厚い響きに驚いたのを覚えています。うかつにも曲名を確認しないまま時間が過ぎていくものの、ときおり頭をよぎるその響きが気になって、何度となくその筋の友人になんとかダァーっと分厚い響きで始まるすごい曲知ってるか？ときいてはみたものもちろん話は伝わらないままだったのです。とにかくネリベルやらニクソンやらフーサやら綺羅星のような現代吹奏楽にはまりはじめた頃でしたからねえ。きっとあれも名のある新進現代作曲家の作品なのだろうと思っていただけです。そうおもって現代曲コーナーばかり探していたのですから見つからないわけですよええ。ようやく判明したのは高校も終わる頃にNHK年末特集で放送されたカラヤン/ベルリンフィルのブラームス交響曲全集を見たときでした。なんとこれが名高きブラームスの1番だったのか！新進の現代作曲家じゃないのか！といった衝撃も同時に受けたのです。

とはいえ不協和音盛り盛りの衝撃の冒頭から一転するアレグロの主部以降はいわゆる伝統的クラシックの響きを感じられ、若き現代曲マニア的にはあまりぐっとこなかったんですよええ。あのまぼろしの曲はなんなのかと捜し求めていたにもかかわらずです。あゝなんという若気の至り... ところが大学オケに入ったときに先輩が担当されたブラームスの1番は決して冒頭だけの曲ではありませんでした。そりゃそうですよねえ。申し訳ございません。

ブラームスは生涯に4曲の素晴らしい交響曲を書いたわけですが、第1番はなんだか別格ですよええ。といったことで無知な私としてはまずはブラームス本を紐解いてみました。ありがとう横浜市立図書館。



横浜市立図書館で借りた書籍の一部

どの本も3分の1くらいはシューマンのお話ですね。それからたくさんの手紙。そしていつもどこかに旅していました。当時のことはわかりませんがいろんなところで徒歩で出かけるんですよええ。バックパッカーだったのかもしれない。ピアニストとして世に出て、リストとはうまくい

かなかつたらしい20才のブラームスがシューマンを訪ねたのも徒歩旅行であったと言います。健脚ですねえ。わたしのヨーロッパの印象のひとつは都市と都市のあいだはすぐく離れていて建物も人影もみえないというものなんです。あんなになんにもないところを歩いていくなんてよほどの孤独好きか旅中毒か、はたまた登山家のような心境なのかなと思ってしまうのです。ちなみにそのころのブラームスは音楽室の後ろに貼ってあったひげもじゃではなかったのです。イケメンです。紅顔の美青年です。シューマンが描かせたというこのスケッチをごらんくださいませ。グラビアか少女マンガかといった印象ではありませんか。さてこの美青年ブラームスが精神の病であったというシューマンを元気づけ、情熱的な賛辞を受け、その妻であり著名なピアニストであったクララ・シューマンに魅せられたのだそうです。ドラマですね。心から尊敬するシューマンの賛辞に衝撃をうけたブラームスはその内気な情熱によって極めて厳しい自己批判で全ての自己作品を見直したそうです。



紅顔の美青年、20才のブラームス

その頃シューマンが音楽出版社ブライトコプフに書いた手紙はこんな具合です。

「ここに一人の若者が現われ、彼はその驚嘆すべき音楽によって私たちにこの上なく深い感銘を与えました。今後彼は、音楽の世界において最も大きな感動を呼び起こすであろうと私は確信しております」

(デュッセルドルフ、1853年10月8日付)

そういったことでそれまでの作品をだいたい書き直してからとのことですが、ついにブラームスは(きっと歩いて)ライプツイヒに向かいブライトコプフと交渉を果たし、遂に作品が初出版されたとのことです。翌1854年にはふたたびハノーバーに(きっと歩いて)訪れたヨアヒム家で、演奏旅行中のシューマン夫妻に再会したのでした。しかし再会の喜びもつかのまに、シューマンはライン川に身を投げ、入院してしまったのでした。ああ... やがて亡くなってしまったシューマン。ブラームスは残されたクララと8人の子供達を守っていくことを決意すると同時に「結婚」しないことも決意したそうです。「自由に、だが孤独に。」

相変わらずウイーン、バーデンバーデン、ハンブルグ、ボンなど行ったりきたりしているうちに母親が亡くなり1867年の大作「ドイツレクイエム」を発表。ようやく作曲家としての生活を決心したとのことです。そのときブラームス36才。でもまだ交響曲は書きませんねえ。やがてウイーン楽友協会の芸術監督に就任しますが3年で逃げ出し、ついに42才のとき、交響曲に取り組んだそうです。ウイーンで庶民のレストラン「赤毛のハリネズミ」に通いながら、バルト海のリューゲン島に滞在しながら、



ブラームスが常連だった、レストラン「赤毛のはりねずみ」

ドボルジャークを見出しながら。最後の仕上げはバーデンバーデン、クララの別荘だったそうです。執筆には2年とかからなかったとのことですが、その構想は21年前から練られていたそうです。22才のときから書いては破り書いては破り。そして仕上げたものは必ずクララに見てもらおう。そのときのクララのコメントは「この交響曲には、ベートーヴェン的な構築力とスケールの大きさがうかがわれます。」「ただし、この偉大さを理解するには、すぐれた批評家の耳が必要でしょう。」というものだったそうです。クララの慧眼もすばらしいですよ。衝撃の冒頭、暗い情熱、わずか1年後にペルチャッハで書かれたという第2番の明るく素直な響きとは明らかにちがう世界の交響曲ですよ。シューマンとの出会いと賛辞からスタートした22才の野望をついに43才で完成させたのです。クララをはじめさまざまな人と出会いながらも結婚や芸術監督などの安定と責任を拒否し続けたブラームス。ずっと青年の心と野望を持ち続けた人だったのではないのでしょうか。「自由に、だが孤独に。」

そのころの友人への手紙にはこうあります。

「さて、ここにお伝えしておきたいと思ひますのは～たぶんあなたは大変驚くでしょうが～私の交響曲は演奏時間が長くかかり、また必ずしも魅力的ではないということです」

(カール・ライネック宛)

うーん、ブラームスの魅力と言うのはとっつきやすいものではないと思うのです。その一端はメロディの分かりにくさではないのでしょうか？ここからは私なんぞが語るのおこがましいところではありますが、第1番の中身に入ってみたいと思います。4つの楽章からできていますね。まずは第1楽章です。

冒頭は不協和音満載の衝撃サウンドです。この中に歌えるメロディを見出す方というのはすでにかのその道の方ではないのでしょうか？コントラバスとティンパニがド～ド～ド～と鳴り響かせるなか、木管とヴァイオリンはド～シフラット～ラ～と降りてきますしヴァイオリンとチェロはド～ドシャープ～レ～と登っていくんですよ。同時に響き渡るんです。なかなか歌えないですよ。それなのにこれが全曲に渡って使用される主題のひとつだと

いうのです。(そう言えばこのテーマはプロコフィエフの『ロメオとジュリエット』のモンタギュー家とキャレット家のテーマやマルチヌーの1番の衝撃冒頭にも通じるものがありますねえ。どちらもかっこええですね。)この衝撃の序奏から一転してアレグロに入った所でさっそくド～ドシャープ～レ～を使ってからようやくミフラットソ～ミフラットソ～という少しは歌えそうな主題が登場し(実はすでに序奏に登場してますが...)、古典的な色合いになりますね。しかしながら、この主題だけを取り出して歌ってみたくなる人はどのくらいいるのだろうか？と思うわけです。このあたりに22才の構想から43才の発表まで書いては破り書いては破ってきた野望と執念がこもっているのではないかと思います。こんなに歌えない衝撃の冒頭なのはこの第1番だけですよ。その後の交響曲第2番、3番、4番の冒頭はいずれも口ずさみたくなる印象的なメロディばかりじゃないですか。いいメロディありますよねえ。

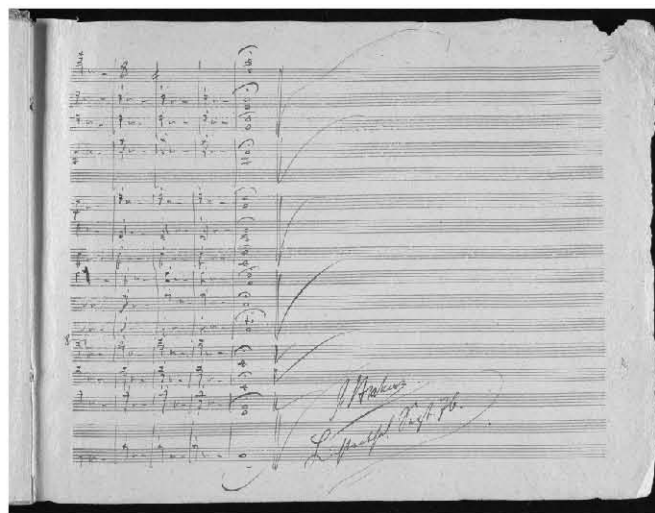
それでは第1番ってだめなん？とならないところが第1番特有の凄みだと思ひますよ。不協和音満載の魅力的ではない冒頭主題にも関わらず、その展開は緻密かつ繊細に調や音色を紡いで様々な魅惑の響きがあらわれます。もちろんそれだけでも素晴らしいわけですが、実はそこに隠れている歌いづらい主題に気がついてしまうと、それが全体を貫いて長い長い大河ドラマのようなドラマティックな姿が浮かび上がってまいります。こうなったらもうあなたは第1番の虜！虜になったらこのドラマティックはこの歌にくい主題じゃないとあかんやろ！という人になってしまうことでしょう。ブラームスの魔力ですよ。こういう感じは第2番以降の交響曲ではなかなか味わえないと思ひます。さてそんな第1楽章は厳しく力強くはげしい展開を繰り広げたのち、あの衝撃の序奏部をなにかを諦めたかのように薄明りな響きで再現させて静かに終わってしまいます。ほんま驚きですよ。

それでは第2楽章に参りましょう。ゆっくりとした歩み。ところどころ迷いながらも1人で思いを巡らせて空を見上げているようです。旅を続けたブラームスならではのモノローグではないかなあ。美しいオーボエやクラリネット、ホルンとヴァイオリンのソロも誰かに向けたものというより1人でなにかを想いながら弾いているように思ひます。ヨハネス暗い情熱と言われる所以ではないのでしょうか。私的にはベートーヴェンの交響曲第5番の第2楽章の冒頭を思ひ出したりします。もちろんブラームスは途中にファンファーレとか入れませんが..

さあ、ここまでも相当素晴らしいわけですがやはりこの後が重要です。私的には第2楽章までは自分を見つめた独り言の世界。そして第3楽章からはいよいよ顔をあげて誰かに語り始めていると思ひます。

といったことで第3楽章は第4楽章への胸躍るような導入編です。皆さんいかがでしょうか？素晴らしい歌えるメロディではありませんか！これまではなんだったのか？朴訥として愛らしいクラリネットソロからはじまって、ああ、よかったね。といった感じにすっと終わってしまいます。話しかけられたような気がしませんか？

第4楽章は再び第1楽章冒頭の衝撃主題と陰鬱なエコーのアダージョ序奏からスタートです。うーまた歌えないなあ、どこがメロディかなーとなるわけですが、実はここにはいずれアレグロではっきりあらわれる真打ちのメロディがひそんでいますね。にくいですねえ。さて怒涛の展開がティンパニの長いロールで断ち切れ静まってくると... ティンパニと弦楽器の密やかな12連符の響きの上にホルンが、そしてフルートが、誰かに向かって歩き出す素晴らしいメロディを高らかに鳴り響かせます。素晴らしい！なんて素晴らしいのでしょうか！ここだけでも後世に残る名曲！そして神の楽器トロンボーンの祈りのコラール。これは天の相づちなかなあ。あゝなんという美しい響き。そしてまた自立のメロディが帰ってきます。もうたまりません〜と悶えているとそこに駄目押しのようにやってくる弦楽合奏の真打ちメロディ！前を向いて歩き始めるアレグロです。くーっ！これがブラ1ですよええ。高校の頃はここにたどり着く前に飽きちゃってたんだよなあ。冒頭に驚いただけだったんだよなあ。と今思う52才の秋なのでした。学生の頃のアマオケ宴会でマラ3でどんな曲？というよくある質問に冒頭のホルンを歌い始めると、思わずブラ1の4楽章になってしまうというくらいの素晴らしいメロディです。あゝそうなんですよね。凡人がラジオやCDで聴いていてもなかなか集中して4楽章までたどり着かない曲なんじゃないでしょうか。演奏会に行くとか先輩がやってるとか自分が演奏するとかでないかねえ... だけどそこまで到達してしまったらもう抜け出すことはできませんよ〜その後はもっともっとめくるめく箇所満載ですよ！皆さん。さあここからは解説不要です。打楽器奏者としてはここから勝負どころですが、そちらも解説不要ですね。



22才からの野望の最終ページ

交響曲第1番の初演は1876年11月4日、それはワーグナーがバイロイト祝祭劇場のこけら落としで「ニーベルングの指輪」を初演した年だったそうです。すごい時代ですねえ。

それでは若き日の野望に満ちた衝撃の冒頭から自立した天上のメロディにいたるブラームスの21年間をお楽しみください。141年前の来週の土曜日に思いを馳せて...

(山本 勲)

## 演奏会のご案内

### 水星交響楽団 第57回定期演奏会

2018年4月30日(月・祝)  
13:00 開場 13:30 開演(予定)  
ミュージア川崎 シンフォニーホール  
全席自由 1,500円

バーンスタイン 『ウェストサイド・ストーリー』より  
シンフォニック・ダンス  
マーラー 交響曲第7番 ホ短調

指揮 齊藤 栄一  
ゲスト・コンサートマスター 西江 辰郎  
(新日本フィルハーモニー交響楽団コンサートマスター)

水星交響楽団ホームページ <http://suikyo.jp>  
お問い合わせ(Eメール) [info@suikyo.jp](mailto:info@suikyo.jp)

### 一橋大学管弦楽団 第65回定期演奏会

2017年12月15日(金)  
18:00 開場 19:00 開演  
東京芸術劇場 大ホール  
全席指定 S席 1,000円 A席 500円

ラヴェル ラ・ヴァルス  
レスピーギ ローマの松  
ラフマニノフ 交響曲第2番 ホ短調

指揮 田部井 剛

一橋大学管弦楽団ホームページ  
<http://jfn.josuikai.net/circles/orchestra/>  
お問い合わせ(Eメール) [info.hit.concert@gmail.com](mailto:info.hit.concert@gmail.com)

# 水星交響楽団 第56回定期演奏会出演者

常任指揮者  
齊藤 栄一

## ファーストヴァイオリン

伊東 陽子  
◎梅津 詩帆  
遠藤 颯  
大西 彩加  
岡村 昂洗  
佐藤 直人  
澤田 知洋  
鈴木 尚志  
高橋 熙  
高原 苑  
滝澤 蘭  
土屋 和隆  
永井 翠  
日比 俊太  
宮川 妙子  
宮川 雅裕

## セカンドヴァイオリン

石川 貴隆  
織井 奈津乃  
加藤 峻一  
川原 ひかり  
黒川 夏実  
小林 美佳  
櫻田 雅信  
鈴木 満里奈  
砂川 湧  
瀬島 江里加  
◎徳地 伸保  
西沢 洋  
前田 啓  
森 勇人  
米嶋 龍昌

## ヴィオラ

秋枝 美咲  
網中 愉香  
◎太田 文二  
小澤 未来  
落合 純一  
川俣 英男  
木村 納  
古宇田 凱  
田中 優  
平田 拓也  
三上 さやか  
山口 実

## チェロ

大久保 雅子  
加藤 碧子  
木田 萌子  
北岡 正英  
小林 玄季  
◎首藤 ひかり  
橋 温子  
中山 憲一  
中山 佐知子  
森 千晃  
能岡 雅人

## コントラバス

阿部 洋介  
石附 鈴之介  
大西 功  
◎刈田 淳司  
小久保 沙耶  
櫻井 望  
田中 文彬  
野村 美里  
増渕 悠太

## フルート

門脇 文子  
斎藤 美唯  
西村 かよ子  
◎本田 洋二

## オーボエ

黒川 達郎  
◎齋藤 暁彦  
寺田 吉太郎  
野口 秀樹

## クラリネット

清水 樹士  
◎藤原 誠明  
前中 悠輔  
横地 篤志

## ファゴット

伊藤 綾香  
小田中 優介  
金谷 蔵人  
◎富井 一夫  
福島 知浩

## ホルン

伊集院 正宗  
岡本 真哉  
◎島 啓  
深村 美佳  
山崎 智哉  
山城 晴香

## トランペット

浅田 健二  
家田 恭介  
◎岩瀬 世彦  
金子 恭江  
神山 優美

## トロンボーン

石井 志歩  
小林 威之  
櫻井 統  
◎佐藤 幸宏  
茂木 颯花

## チューバ

植松 隆治  
東海林 拓人

## パーカッション

上田 祥太郎  
岸 敦子  
島崎 亜実  
鈴木 海里  
芹澤 美津穂  
◎椿 康太郎  
高橋 淳  
山本 勲

## ハープ

東森 真紀子

## ピアノ

西沢 洋

## チェレスタ

鈴木 海里  
西沢 洋

◎=パートトップ

## 本演奏会でお世話になったトレーナーの先生方

長田 雅人 菅野 宏一郎 西江 辰郎 林 憲秀  
古野 淳 三橋 敦 山口 遥平 山田 裕治

(五十音順・敬称略)

## 水星交響楽団運営委員会

運営委員長: 植松 隆治  
コンサートミストレス: 梅津 詩帆  
弦インスペクター: 川俣 英男、刈田 淳司  
木管インスペクター: 横地 篤志  
金管インスペクター: 佐藤 幸宏  
打楽器インスペクター: 山本 勲  
総務: 伊東 陽子  
ステージ・マネージャー: 櫻井 統  
会計: 金子 恭江、黒川 夏実  
楽譜: 伊集院 正宗、野口 秀樹  
宮川 雅裕  
運搬: 刈田 淳司  
会場: 横地 篤志  
広報・受付: 岡本 真哉、鈴木 海里、  
鈴木 牧、土屋 和隆、  
東海林 拓人  
レセプション: 川原 ひかり、首藤 ひかり  
インシュペクター: 椿 康太郎、永井 翠  
デザイン: 津田 まや